

保育観の形成過程に関する事例研究

梶田正巳 杉村伸一郎¹⁾ 後藤宗理²⁾
吉田直子³⁾ 桐山雅子⁴⁾

I 問題

本研究で取り組むテーマは、簡単に言えば、長年、保育所や幼稚園で幼児教育に携わった保育者（教師）が、どのような体験を経ながら、保育についての見方・考え方を形成したり、発展させたりするようになるか、ということである。保育についての見方・考え方は、保育観ということである。

筆者らが、このような研究テーマに関心を持つようになった当初の動機は、「具体的な事例へ保育者はどう対応しているか」（梶田正巳、杉村伸一郎、桐山雅子、後藤宗理、吉田直子、1988）という先行研究をしたことから発する。この研究では、保育者の指導行動が子どもによって異なることを調べるために、カウンセリングの対象になるほど問題ではない程度の、母親へ甘える依存性の強い子、腕力のある乱暴な子、いつも一人の自閉的な子の三つの事例を示し、その子どもをどう指導するかについて、保育者に応答してもらった。研究では、37項目の具体的な指導行動よりなる質問紙を示し、その回答を分析して、子どもによって保育指導に対する見方がどう異なるかを明らかにしたのである。

こうした研究を通じて、われわれの問題意識に浮かび上がってきたのは、保育者の持つ保育についての見方・考え方は、一般的に言えば、その人個人の成長・発達のプロセスと深いつながりがあるのではないか、ということであった。すなわち、保育者が現在持っている見方・考え方は、例えば、それ以前の職業遂行上のさまざまな体験にも強く影響を受けているだろうし、保育者が自身の家庭生活においてどのような体験をしたかによっても、影響を受けるだろう。さらに遡れば、その人が乳・幼児期から青年期に至る発達の過程で経験したことともかか

わりがある。こうした条件を知ることができれば、保育に対する見方・考え方をよりよく理解できるだろう、と考えたのである。

とはいえ、保育者が成長の途上で体験する出来事が保育についての見方・考え方に影響することは当然であったとしても、どのように影響するのかを明確に規定することは非常に困難である、ということも分かってきた。というのは、体験が影響することは一般的には分かっている、一歩踏み込んでどんな体験が影響するかとなると極めてむずかしくなる。まして、どのように影響するかという体験効果の機能になると、手に負えなくなってしまうのである。いずれにしても、生涯にわたる体験のマクロな影響のプロセスは重要であり、強い関心を持ってはいても、旗幟鮮明に追究することが困難ではないか、ということも分かるようになった。

そこで、筆者らは、たとえ初めはスマートな研究とは言えないとしても、素朴に問題を探究することにしたのである。方法は次項で示すように面接法により、3人の保育経験者にこれまでの保育経験を振り返ってもらうことから始めた。これは別の言葉を使えば、保育者の「個人史」を研究することでもあり、個人史を明らかにしながら、保育についての見方・考え方の変化・発展に寄与する体験とは何かを個人レベルで引き出そうとしたものである。

こうして全般的に個人史を調べる方法とは別に、保育指導の目標を設定して、面接質問することにした。具体的には、先行研究で使った2つのケースについて、ケースに対処する考え方や背景にある原因についての見方、ケースの子どもが将来どのように成長・発達するのか、についての予想などを総合的に聴取することにしたのである。これは面接調査に共通の項目を設け、その応答を比較することによって、それぞれの保育者の体験がどのように反映するのかを、共通の項目というやや統制された条件で明らかにしようとするものである。

こうした質的な面接調査によるアプローチは、先行研究での質問紙調査のデータと違い、統計的なデータ解析

1) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生

2) 名古屋市立保育短期大学

3) 稲沢女子短期大学

4) 名古屋市治療教育相談センター

になじむものではないが、被験者の応答の状況によっては、柔軟に聞き出すことのできる長所をもっており、仮説発掘的な研究としては意義のある方法ではないかと考えられるのである。

II 方法

1 質的研究としての面接法

われわれがこれまでにこなってきた質問紙調査法とその統計的処理では、保育者の一般的な指導の特徴やその背景はあきらかになったが、保育者の指導法がどのような過程で形成されていくのかという質的な問題が残された。そこで本研究では、主として臨床的分野で用いられる、面接法による事例研究という、個性記述的方法を採用して、この点を追究しようとした。つまり、保育経験の豊かな保育者にみずからの保育の方法と自分の生育史、学生生活、若いころの保育などを個別に語ってもらい、その資料をもとに保育観の形成についての質的な分析を試みた。

面接法とは、一般に、人と人とが、一定の場所において直接顔を合わせて、ある目的をもって、主として言語を用いて話し合い、情報の交換、意志の伝達、相談、問題の解決などの目的を達する方法である。面接法には目的によって大別すると、臨床的面接法と調査的面接法があるが、われわれが採用したのは、あとに述べるような質問項目を中心とする情報収集を目的とした調査的面接法である。ただし、事例研究という性質上、次のような特徴をもった調査的面接法であるといえる。

事例の特殊性を最大限尊重するために、質問は細かく的をしぼったものばかりではなく、被面接者の解釈によって発言の長さや詳しさの程度が自由である項目も用意した。また、発言が簡単であったり前後の意味や背景がわかりにくいときなどはこちらからもそのつど質問を追加した。

2 被面接者と面接状況

被面接者は同じ職場に勤める3名の保育者である。年齢その他の内訳は表1のとおりである。

面接場所は被面接者の幼稚園の職員室および図書室で、一人の被面接者につき2回の面接を実施した。面接時間は、1回約1時間半であった。2回実施したのは質問内容が多いということの他に、個人的な事情をできるだけ話してもらうにあたってリラックスしていただくことをねらったためである。

面接の記録は被面接者の許可を得て録音によった。また、面接者はそれぞれメモをとった。

3 質問内容

第1回目の面接は次のような手続きをとった。まず主な質問者(表1下線)が面接の目的を説明し、理解を得る。次に以下の項目について1つずつ質問し、答えてもらった。他の面接者も、ここに書かれた項目を補足したり、繰り返したりする発言をときどきはさむことがあった。

<質問の項目>

- ①ケース1のさなえ(図1)のような子どもに対しては、現在ならどんな指導をしますか。具体的に述べてください。
- ②ケース1のさなえのような子どもに対して新任の頃ならどんな指導をしますか。具体的に述べてください。
- ③ケース2の武司(図2)のような子どもに対しては、現在ならどんな指導をしますか。具体的に述べてください。
- ④ケース2の武司のような子どもに対して新任の頃ならどんな指導をしますか。具体的に述べてください。
- ⑤今までの経験のなかで、指導に困った子どものタイ

表1 被面接者と面接状況の内訳

	Aさん	Bさん	Cさん
年 齢	44歳	41歳	52歳
保育経験	24年	22年	25年
面接日時	①1990. 5. 23	1990. 1. 20	1990. 6. 8
面 接 者	<u>後藤・吉田</u>	後藤・桐山・吉田	後藤・杉村・吉田
面接日時	②1990. 5. 30	1990. 4. 28	1990. 6. 15
面 接 者	<u>後藤・吉田</u>	後藤・桐山・杉村	後藤・杉村・桐山

* 下線のついた面接者が主に質問した。

ケース：1＜さなえさんの特徴＞

4歳の女児です。登園したときも、母親からなかなか離れられません。先生に対しても、依存的で、身体をいつもベタッとくっつけてきます。離そうとすると、メソメソして、泣きはじめることもあります。先生を独り占めにしたいようで、友だちにはあまり関心がありません。

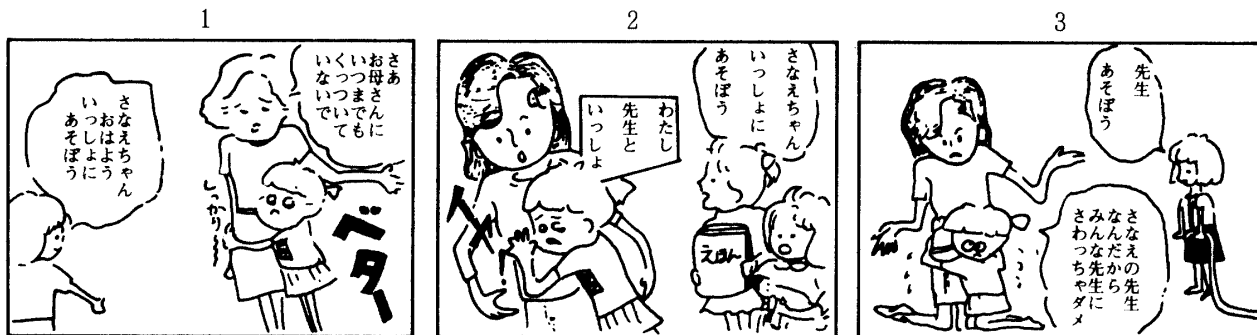


図1 さなえの特徴の記述とイラスト

ケース：2＜武司くんの特徴＞

4歳の男児です。活発で友だちとよくあそびますが、強引に自分の思うようにします。体が大きいので、腕力にうったえて友達を負かせ、泣かせることがしばしばあります。先生のいいつけが聞けないことも多く、乱暴な行動に出ることがよくあります。



図2 武司の特徴の記述とイラスト

ブは変化しましたか。そういう子どもに対してはどんな指導をしましたか。新任のころから、5年おきぐらいに例をあげてください。

- ⑥これまでの経験から自分のどこが変わったと思われ
ますか。
- ⑦保育者としていつどんな勉強が必要ですか。
- ⑧理想の保育者とは。
- ⑨所属する園の方針に対する理解や受け止め方、人間
関係は経験とともにどのように変わりますか。
- ⑩新任の保育者へのアドバイスは。
- ⑪そのほか、自由に。

第2回目の面接は前回の面接の感想などを話題にしたあと、次のような質問を行った。

- ①〇〇さんの出身や子どものころのことなど、差し支
えないかぎりですいたちから保育者になるまでのお
話を聞かせてください。

ここでは自由に発言してもらった後、次の点について
の話がなかった場合には以下のような質問を追加した。

- ②いつごろから何故保育者になりたかったか。
- ③影響を受けた先生や人は。
- ④保育者として自信ができたのはいつごろか。
- ⑤自分の成長を振り返り、いつ何がどのように変化し
たか。
- ⑥自分の適性についてどう思うか。

そのほか、面接や自分を振り返っての感想なども最後
に話してもらった。

4 結果のまとめ方

それぞれの被面接者の逐語録に基づいて整理のための
枠組みを設定した。しかし、被面接者によっては質問し
ていない項目もあるので、すべての場合に共通する枠組
みとはなっていない。

さなえ、武司に対する指導では、具体的な接し方、見通し、新任の頃の接し方などの項目についてまとめた。

それぞれの被面接者の個人史については、生育史、学生生活、保育者になってからの結婚・育児などを含めた節目節目での出来事を中心にまとめた。

まとめた内容は公表のための承諾を得るため、各被面接者に送付された。そして被面接者は、記録内容の誤りを正したり、必要な場合は適当な修正を行うことが依頼された。その結果、部分的修正を加えることで公表の承諾を得ることができた。

Ⅲ 結果と考察

1 Aさんの事例

1-1 Aさんの指導法

(1) さなえに対する指導

①具体的な接し方

さなえがお母さんから離れないのは、頼りになる人と一緒にいたいという気持ちからだと思うので、お母さんの代わりは私なんだというつもりでいつも一緒に過ごす。そして最初に信頼関係をつける。依存的な子はとにかく安定感をもたせるのが大事である。安心して園で過ごせるように、何が好きか、どういうことをしてほしいのかを読み取るようにする。また、「〇〇を手伝ってね」とか「〇〇と一緒に来てくれる？」など声をかける。

そして自分の視野のなかで動きながら、少しの友達と先生、さらにもう少し大勢の友達というように、動ける輪が広がっていくようにする。さなえに、先生を独り占めにしたい、自分だけにかかわって欲しいという態度が見られたときは、あなただけの先生じゃない、他の人皆の先生なのよということ、言葉ではなく行動で示す。指導には、子どもの味方であることを知らせるような優しい側面と、こういうことはいけないんだと譲らない厳しい側面が必要である。

こんな子の場合お母さんも問題があるのでお母さんにもこまやかに接する。お迎えの時などに、「こんなことができましたよ」などできるだけ話をして、接触を密にする。

②見通し

親にベタッとしていて離れない、つまり親に依存している子は扱いやすい。泣く子ども、泣いてばかりいて園に入ろうとしない子どものほうが長くかかる。親から離れられないことは入園時や進級時にはよくあることだ。前述のような対応を続ければ、一週間ぐらいでなおってくる。とくに4歳の女の子であれば。

③新任の頃の接し方

はじめのころはほとほと困るだろう。お母さんから離

れないときは子どもを抱きとる。遊べない子どもにはお手伝いなどをさせるだろう。なるべく一緒にいていろいろ諭すように言っただろう。あまりベタッとくっついて離れないときは、あなただけの先生じゃないんだということ、言葉を直接言うだろう。今思うと、言葉で言っても子どもの行動は変わらないし、子どもの心を傷つけるだけなのだが。若いころは子どもに手伝いをさせたり、一緒に行動するというような接し方をすると同時に、言葉で諭すこともよくやっていたと思う。

(2) 武司に対する指導

①具体的な接し方

回りの子どもが自分ではなにも言えなくて助けを求めてくる場合と、回りもある程度成長してきて「おまえばかりずるいじゃないか」と言い返せるようになっている場合とでは先生としての出番や言葉のかけかたは違ってくる。

前者の場合は、訴えてきた子どもたちが困っているなら加勢したり、「あなたが鬼がいやだったら武司くんがいやだとちゃんといわないといけないんじゃないの」と助言する。その一方で武司に対しても、話を聞いてあげた上で「あなたのわがままじゃないのかな」と話す。後者の場合は両方のいいぶんを聞いてあげる。そして時には調整したり、黙って見守ったりする。一方的に処理しないで充分に両方のいいぶんや行動を知るようにこころがける。

年齢が低い場合はもっとかみ砕いて話すが、相手の気持ちを理解するようにしむける点では同じである。

武司のような子どもにもよいところがある。武司自身にたいしてはそこを話題にして、「こんな素敵などころがあるんだから、悪いところを直すともっと友達がいうことを聞いてくれると思うよ」というような声をかける。

②見通し

武司は、強引で自分の思いどおりにしたい、感情をストレートに出す子どもだろう。年齢の高い男の子で、自由遊びの場面でこのような態度がでてきやすい。このような子どもには社会性を身につけさせることが必要である。これには時間がかかる。毎日が教師とのぶつかりあいになるだろうがやり甲斐もある。卒園までに少しでも変わってくれたらという気持ちで取り組む。

③新任の頃の指導

主任に相談する。本には画一的なことしか書いてないので、キャリアのある先生の助言を聞いてあれこれ試してみる。その結果をもとにまた相談する。また、若いころは、子どもになめられては大変という気持ちがあったし、信頼関係も大事だと思っていたので、やさしい言葉

をかけながらもいけないときはきっぱりした態度をとるようにした。

(3) 困った子どもの指導例

①牛乳を全く飲めない子ども

教諭経験5, 6年目のころ牛乳を全く飲めない子どもが入ってきた。

親によるとこの子は生まれたときから全く飲めず、さとう水で育てたとのこと。園でも、牛乳をほんの少しにして勧めても飲まないし、わざと床にあげてしまったりして困った。これを飲んでくれないといけないのにとムキになって、ある日一口の半分ぐらい飲ませたところ親から大変しかられた。しかしアレルギーでもなかったし園生活をおくる上では一口でも飲んで欲しいのだと親を熱心に説得した。

今になって思うと、「頑張りましょうね」ともって親と歩調を合わせながら指導したのではないか。若いころは親との関係が大事だと知りながら、実際はその点が落ちていて性急すぎて、通じなかった。

②てんかんの女兒

教諭経験15, 6年目のころてんかんの女兒を受け持った。知恵遅れがあり言葉もなく全体で1歳半ぐらい遅れた子が、3歳児の19名のクラスに入ってきた。それまではそのような問題のある子は、主任が別の小人数のクラスで引き受け、ときどき同年齢のクラスに合流させるというやり方で対応してきた。しかしこの女兒のときから、普通の子と同じように生活年齢のクラスに入るようになった。

初めての経験だったが、この女兒の言葉や表情を出させたいと思い、始終話しかけ係わりをもった。クラスの他の子どもがどんな反応をするか心配だったが回りの子どもも幼くて、この子の遅れを気にせず接してくれたのが救いだった。1年経つころに言葉がでてきて、身辺のことはできないが生活に慣れてきた。年中児のクラスへの進級について、かかりつけの保健センターの専門家に相談すると、最終的には先生が決めることだといわれた。それを聞いて「1年遅れた子どもがきているんだ。今までどおりに付き合っていけばいいんだ。」との確信を得て、他の子どもと一緒に進級させて、Aさん自身が引き続き4歳、5歳を受け持った。

就学のころにもいろいろな問題が持ち上がったが、その子との3年間はとても大きな体験だった。子どもとの接し方において、自分にはいままでになかった面を引き出してくれた。

③社会性の遅れた男児

教諭経験15, 6年目のころ社会性の遅れた男児が入ってきた。4人兄弟の2番目で母親に甘えさせてもらえない

い、かまってもらえない子だった。他の子どもと一緒に行動ができず、友達や担任が呼んでもひとり遊びを続けるばかり。Aさんが一人していると1対1で係わって欲しい、一緒にいたい、という気持ちが強くあらわれて甘えてくる。しかし皆がいるときは、担任にも近寄らなかった。

とにかく手をかけてほしい子で、5歳になっても基本的には変わらなかった。クラスの子どもが集まる時にもなかなか自分からは寄ってこない。そういうときは、「さきにはじめているから後でいっしょい」と常に声をかける。ひとりで運動場で遊んでいてなかなか来ない時などは、しばらくしてその子のところに行き、「50数えたら一緒に皆のところに行こうね」などと誘ったりした。実際50数えて「さあ、行こう」と連れてくるとなんとか動くことが多かった。一方では家庭との連絡を密にしながら、年齢にこだわらず甘えさせるようところがけた。

(4) 指導の変化と背景

Aさんは、子どものある傾向を直したい時に、言葉で言い聞かせることは無駄だと気づくようになった。言ったことで子どもを傷つけるし、ききめはない。1年1年経験していく中で、かえってマイナスであると悟るようになった。また、自分の子どもの成長を通して、子どもが見えるようになって、そう気づいたのだろう。また、子どもの見方が集団主義から一人一人をまず大事に見ていく方向に変わった。初めの3、4年は集団主義の保育の指導を受けたこともあり集団の成長を大事にする教育課程をつくっていったが、実際の保育をとおして、また意見の異なる同僚や先輩との議論をとおして、個を重視する方向に向い保育の仕方も変わっていった。これはモンテッソーリ、ピアジェなどの考え方を勉強したり、研究会にでかけたり、偏ってはいけないと自覚して本を探したりしたこと、あるいは結婚、子育ての経験を経てきたことなどが影響している、とAさんは語っている。

1-2 Aさんの個人史

(1) 生育史

Aさんはある地方都市に、5人の兄弟姉妹の末っ子として昭和21年に誕生。物心ついたころには兄2人は東京の大学に行っており、年が離れていて怖い存在でもあった。あとの2人は花嫁修行中の姉と高校生の兄。兄妹ゲンカの記憶もない。

小学生、中学生のころはとくに将来の職業についての希望はなかった。友達が看護婦やスチュワーデスのことを言い出してもそんなのにはならないと思っていたが、では何になりたいというものもなかった。

高校3年になって、漠然と中学か高校の先生がいいなと思いはじめた。隣の県の国立大学の数学か英語の方に進もうかと考えるようになった。長兄がそのころ愛知県の高校教師をしていたことも少しは影響していたかもしれない。しかし親が大反対だった。女の子がそんなところを受けるなんて、といわれた。大変ショックだった。家政や文学は自分には全然あわないしどこなら親は許してくれるだろうと考えた。そして幼稚園の先生なら親も反対しないだろうと愛知県の保育系の公立短大を選んだ。子どもや幼稚園が好きならいいわけではなかった。

(2) 短大の生活

Aさんは短大を受験してみて自分の選択が間違っていたと後悔した。受験をやりなおしたいと親に頼んだがダメだった。こうして短大生活は不本意ながら始まった。

短大に入ってみると回りには、美大に行きたかった人や授業料がないからきた人など、自分と同じようにいやいや来た人もいた。しかし半数以上は幼稚園の先生になりたい人達だった。講義は一般教養だけがおもしろかった。とくに英語、憲法がおもしろかった。専門教科が始まっても全然関心がなかった。非常に不真面目な学生だった。しかし、悪い点は取りたくなかったので試験だけは頑張った。その結果、席次は悪くなかった。

教育実習があったが、8週間というのを長く感じた。その中でも、子どもは好きではないし、自分は幼稚園には向いていないと思った。

幼児教育の勉強を放棄しないで続けられたのは、やらなければいけないことはこなしていかなければ、という意志と高校の時取得した特別奨学生の資格を無駄にはいけないという考えからのように思える。学生時代に特に熱心だったのは、合唱と人形劇のサークル活動である。そしてそれらのサークルの学内の責任者として他大学の責任者達と交流し、学外での仲間たちとの話し合いのなかで鍛えられた面が大きかった。

卒業が近づくと友人達から、保育関係の採用試験を受ける話が聞かれるようになったがAさんは全く関心がなかった。卒業したら親の元にさっさと帰り、できれば違う道をやりたいと思っていた。2年経ったので親の気持ちも変わっているだろうと。

ところが2年生の12月ごろ、短大付属の実習園をつくるのでスタッフとして推薦したいと、短大の先生から声をかけられた。非常に驚いた。自分はやりたいとも思っていないし向いていない。人間的な面で適していない、先生の選び方は間違っていると思った。自分はN市の就職試験を受けていなかったし、短大の成績がよかったからそれだけの理由で選ばれたのだと考えた。

しかし、サークルなどの仲間に相談すると、いいこと

じゃないか、やってみたらと励まされた。Aさんの母親は、Aさんの帰郷を待っていたが、せつなく声をかけられたのだし、2、3年ということだから待ってあげようといってくれた。

自分のようなものが申し訳ないという気持ち、幼稚園の先生は向いていないし、できればやりなおしたいという気持ちなどが入り交じりなかなかなか決心がつかなかったが、つい、「はい」といってしまった。

(3) 保育者になって

この園はAさんが就職して2カ月後に開園するという事で、新卒3人によって全くゼロの状態からはじまっている。もちろん短大の助教授、助手による側面的な指導や援助があったが、子どもに接し、現場に直接タッチするのはAさんと2人の同僚だった。

開園までの2カ月間は準備期間だった。Aさんは、4月から他の幼稚園に就職した友人達の苦労話を聞いて不安を抱きながら6月の開園を待った。付属園なのだというプレッシャーもそのころ大きかった。

はじめは教育課程もなく、毎日やったことを記録し、その蓄積をもとに徐々に教育課程をつくっていった。とくに短大で集団主義教育を講じておられたT先生の指導をうけて、子どもを集団としてとらえて育てていこうという方向を持っていた。就職して4年間ぐらいのことである。しかしその後スタッフのメンバーが変わったり、経験を重ねているうちに、ひとりひとりの子どもをしっかり見据えていかなければいけない、個を重視しようという方向に変わっていった。そこに至るまでにはよく同僚たちと議論した。Aさんともうひとりの同僚が集団主義をとる他2人はそれはおかしいという立場だった。本を買って回し読みをしたり、よいと思う本を紹介しあって勉強した。これが就職して5年から10年ぐらいのことである。

(4) 転勤のチャンス

就職して4年目に、前年にある教育大学に転任された上述のT先生より、付属幼稚園を開設する予定なので来てくれないかという誘いをうけた。ゼロからつくることなのでとても気持ちが傾いた。行きたいと思った。しかし、その時の主任に、今抜けられたら困る、とんでもない、といわれた。この言葉がとてもショックで悩んだけれども、結局辞めますと言えず、この園に残ることになり現在に至っている。

(5) 結婚・家庭生活と仕事

24歳で結婚。会費制の人前結婚で、仲間の前で今の仕事を辞めないで続けていくと誓った。

1年後に子どもがうまれたが、Aさんはこの園で働く人のなかではじめて産休をとった職員だったので、いろ

いろいろな苦勞を味わった。子どもを共同保育所や個人の家にあずけて仕事に通う毎日だった。2人目が生まれた時は少し条件はよくなったが、他人に育ててもらった点は同じである。これは母親としては何もおもしろいことがない。わが子は保育園から連れてかえると、御飯を食べるか食べないうちに寝てしまう。その繰り返しであったから、私は何のために子どもを育てているのか、自分が育てているのはよその子ばかりではないか、という気持ちが大変強かった。3人目ができたら今度こそは、ゼロから全て自分の手で育てたいという強い願望があった。

一方結婚して仕事により影響もあった。Aさんに対する園児の親の見る目ががらりと変わったのをAさんははっきり感じたという。園の親達がAさんをよき理解者として見ているのを、肌で感じるようになった。妊娠、出産を経るとさらに親達が心理的に近づいてきたように思われた。Aさん自身にも気持ちの変化があった。お母さんたちは、子育てにおいて自分の先輩であり、何かあったらいろいろ教えてもらおうという謙虚な気持ちで接するようになった。実際、自分の長子より1才上の子どもをもつお母さんたちとの交流が一番深く、今も続いているほどだ。

結婚して2、3年目から夫の両親（別居）が交代で病に倒れ、入院、退院を繰り返した。これは断続的に10年以上続きその間の病院の付き添い、残った親の世話、子育てで大変辛い思いをした。夏、冬の休みのころに入院というのが多かったことも幸いして、夫と交代で休みをとり、なんとかしのいできた。そのようなプライベートな事情が仕事に影響しないように、疲れを子どもに感じ取られないように頑張った。園の親とのコミュニケーションは大事でも、そのようなことは持ち込まない主義であった。

(6) 保育者になってからの勉強

大学の講義ノートは大事だろうと思って、就職してからも目立つところに置いておいたが、実際はいままで一度も取り出したことがない。勉強したいことは現場で探してやってきた。初めはいろいろな研究会にかけた。そのうち、自分で必要な本を探して読んだり、人に勧められたものを読んだり。しかし、本は画一的なところがある。いろいろな実際の経験をして段々身についてくる面が大きかったようだ。

(7) 個人史をふりかえってのAさんの感想

Aさんは2回目のインタビューで、高校、大学、就職のころのことを話しながら「自分がまざまざとわかってくる」「私は流される性格なのだ、自分の思いをバキッとだせば変わったかもしれないのに」としみじみと述べた。大学に入るときから自分を偽ってきてしまったが、

やり直せるならやり直したいという気持ちをずーっと持って過ごしてきた。24年間を振り返ると、ずーっと～しなければならぬという気持ちを優先させて頑張ってきたように思う。心のなかの深いところの気持ちを押し込めてきた。それが悪いとはいえないが、もっと自分に正直に生きたかったという気持ちが強い。

まず、子どもが好きではないというのはこの仕事にむいていなかったのだと思う。先生に推薦するときは成績だけではなく、本当の適性を見極めてほしいと思う。

しかしこの仕事は素晴らしい仕事であると感じることも事実である。未来を持つ子どもを育て、毎年毎年いろいろなお母さんと子どもに接して、申し訳ないくらい信頼してもらえる。子どもとの波長がピタッとあうときは特に素晴らしい。保育者というのは子どもと一緒に育つ部分が多い。

先生としての自信ができたのは自分の子どもの年齢が担当する子どもより大きくなったころから。子どもの成長の見通しがたち、親との関係が変わってきたためだと思う。いまでは子どものことがよく見えるようになった。反面若さがなくなり、そのぶん子どもからみると魅力がないだろう。行動力、パワー、子どもにピッタリくる発想があれば理想的である。

1-3 聞き手による考察

はじめに、われわれが用意したイラストに対するAさんの談話を要約すると、さなえに対してはいつもそばにおきながら話しかける、武司に対しては、回りの子どもとの調整をしながら言い聞かせるということが基本的な指導方法であるといえる。どちらも子どもに現在でできている行動や態度にどのように対処するかが語られた。逆にいえば、さなえや武司の現在の行動の背景となる、性格とか特性は直接的な指導の焦点とはなっていないということである。

とくにさなえの行動は一過性ととらえられており、「一週間もすればなおる」という確信がみうけられた。武司の場合は社会性を身につけなければならないので長くかかりそうだという見解であるが、「長くかかる」間にどんな指導があるのかについては語られなかった。

つぎに、Aさん自身が経験のなかで困った子どもの指導例をまとめよう。われわれの意図は先生になっての24年間のなかで、ほぼ5年ごとにそのような例を挙げてもらい、先生としての経験を重ねることによる指導の変化をあとづけたいということであった。しかし実際には5年目の経験として1例、15、6年目の経験として4例が出された。さきに紹介したのははじめの1例（牛乳を飲まない子ども）とあとの2例（遅れのある女兒・社会

性の遅れた男児)である。

牛乳を飲まない子どもの例では、無理に飲ませたことを振り返りむしろ親と足並をそろえて焦らず指導していけばよかったのではという、反省が中心に語られた。具体的な指導や子どものその後の変化は明らかではない。これは15年以上も前のことでもあり、困った子どもとしての強い印象だけが残っているためと考えられる。

遅れのある女兒の例では、具体的指導として「始終話しかけ関わりをもつ」ことが挙げられた。それによって1年後に、遅れはあるものことばがでてきて、このままやればいいのだという自信をもったという。このような女兒との関わりについてAさんは、「今まで自分ない面を引き出してくれた」と述懐しており、かなり貴重な体験であったことがうかがえる。

社会性の遅れた男児に対する指導の例では、他の子どものバランスを考えた上で基本的には甘えさせることが中心であった。家庭的な背景もあり大きな改善はみられなかったが、そのことがむしろ社会性の遅れた子どもの指導は長くかかるのだということを学習する機会だったのであろう。

先生としての経験によって、日々の指導はどう変化していったかについてAさん自身は2つの点を指摘している。すなわち、ことばでいきかしてもあまり効果がないことに気づいたこと、および集団主義の保育から個を重視する方向への変化である。そのほかにもインタビューの間のことばのはしばしから拾ってみるといくつかの変化があるようである。たとえば、だんだんと母親との接し方が一方的ではなくなりこちらも歩調をあわせていけるようになる、子どもの成長過程の見通しをもって保育にあたるようになる、母親の育児の苦勞が実感できるようになり母親との心理的距離が近くなる、などの変化である。

以上のようなAさんの指導のあり方や変化は、Aさん自身の個人史とどのような関連があるのだろうか。

Aさんは地方都市の旧家の末子ということで物心両面に恵まれた環境で幼少期を過ごしている。大学受験のころに英語か数学の教師になろうかと考えたが親の反対にあり、保育系の短大に進んだという経緯がある。

Aさんの短大生活の特徴は3点に要約される。

- ・不本意ながら保育系に進学したが、終始一貫して子どもや幼児教育が好きになれなかった。
- ・自分は幼児教育に向いていないという自覚をもちながらも保育者としての道を歩んだ。
- ・サークル活動およびそのリーダーとしての活動を通じて、学外の友人たちとの交流を深め人間的に「鍛えられた」。これは、IVの総合的討論でも述べるように、昭和4

2、3年ごろの学生をとりまく時代背景を考慮する必要があるだろう。

Aさんは卒業後郷里にかえってやりなおすことを希望していたが、短大の推薦によって、その時創設された短大付属の実習園の先生になった。この園はAさんを含めた3名の新卒教諭による創設準備をへて徐々に内容を整えたもので、Aさんはそこにはじめから24年間勤務した只一人の先生ということになる。始めの4年間には集団主義保育の指導をうけながらも、その後日々の体験を相互に自由に話し合い、積極的に書物や研究会などでの勉強を積み重ねて子ども一人一人を重視する保育へと指導の形態が変化してきた。

Aさんの結婚は勤めて4年目。その後、出産、育児の経験と同時に義理の両親の看病なども経験した。それは働きながらの子育ての苦勞の体験、十分に自分の子どもとの交流ができないつらさの体験でもあったようである。

このような経歴のなかで、とくに、Aさんが大人に囲まれて大切にされて育ったこと、リーダーとして活躍したことなどが、幼児を教育する先生としての態度の形成に大きく寄与しているのではなかろうか。また、妊娠、出産、育児の過程はAさん自身を成長させた。親の気持ちを知り、子どもの成長の見通しを学ぶ中で、園児の親を子育ての先輩として見るようになった。一方、親が心理的に近づいてきたことはその後の先生としての活動に積極的な意味をもたらしていったことは間違いないだろう。

ここで、Aさんの談話に対する聞き手の印象を総合して、Aさんの指導の特徴と背景について考えてみよう。

Aさんは指導法の質問に対して、具体的な指導よりもどちらかといえば、いままで接してきた経験から子どもの姿について詳しく語った。先に紹介できなかったのは遠視の子ども、養護施設からの子ども、母親が鬱病の子どもなどのエピソードである。結果をまとめるにあたっての視点はむしろ、先生は具体的にどう接しているかが中心であったので、それらの子どものエピソードは省略している。そのためAさんの発言全体に表れているAさんらしさ、すなわち、子どもの姿をじっくりみつめて語るという傾向は、ここでは希薄になっていると思う。

このように、Aさんが子どもの姿を詳しく語り、自らの指導については比較的発言が少ないのは、ひとつには子どものありのままの姿が意識の大きな部分を占めているからではないか。子どもを最大限受け入れる人と言えるかもしれない。Aさんは同僚から子どもを全然叱らない人と評されていると聞くが、そのあたりがAさんの指導のポイントであろう。

個人史の特徴は優等生であったことと幼児教育は希望の道ではなかったことである。「流される性格かな」「どうしてあのとき思いどおりにやらなかったのか」と述懐しているが、現状を結局あるがままに受け入れ、そこで力を充分に発揮していく人といえよう。その点もまた子どもを受け入れる保育につながるかもしれない。

理想の保育は？ という質問に対して「考えたこともない、強いていえば若さが欲しい」ということであった。これは24年のキャリアからくる自信の表明であり、いまのAさんの日々の指導は多分ひとつの理想形なのであろう。その具体的な部分を知るには、克明な観察によるしかないと思われる。

最後に先生としての変化の節目についてのべる。直接の回答はなかったので聞き手の推測であるが、4年目の転職のチャンスを逸したころ（このころ結婚）、10年目ごろ（自分の子どもが園児の年齢を上回る）のふたつの時期があげられる。そのほかに15、6年目の障害児など困難な子どもとの出会いもいくつかの節目を作っていると思われる。いずれにしても、保育は保育者の個人的経験と園児との相互作用の両面から影響を受けて深まり、合理的、理想的な方向に変化していくといえよう。

2 Bさんの事例

2-1 Bさんの指導法

(1) さなえに対する指導

①具体的な接し方

家庭でどのように過ごしているかということが基本です。兄弟関係とか、母親の様子とか、近所の友達とか、いろいろ聞かないとわからない。入園してすぐの子なのか、かなりたってもこうなのか、それによっても接し方はちがってくる。

入園してすぐの子どもであれば、親からの離れが悪いのは普通なので驚くことはない。園を好きになってもらう、楽しいところにしてもらうのが基本で、そのためには、担任を好きになってもらうこと、まずは私と仲良くなるのが、大事なことだと思う。こういうふうにはべたっと来てくれる子は、つながりがつきやすいので、まず最初はその子を連れて歩く。そうしながら、何かして遊ぶ。そういう子が複数だったりすると、大変だが、2、3人なら、連れて歩いて、その子の好きな遊びに誘ったりする。

入園時ではなく途中からこうなる子や長くかかる子の場合も、基本的には、受けとめる。そのうえでその子が、力を発揮できるようなことをみつけてあげる。先生と信頼関係ができると「何かやろう」と言ってくると思うので、それを一緒にする。こんなふうに先生に甘えてくる

子は、期間はかかっても、結構やりだすんじゃないかと思う。何も言わない子の方が、むつかしい。

②原因

入園の頃は、新しい生活に不安があるからこうなると思う。入園時でなく、途中からこうなる子は、例えば下に赤ちゃんができたとか原因はいろいろある。園に対する不安、居る場がない、満たされていない、甘えたいというような場合があるように思う。そういう場合はお母さんとよく話す。以前に、年長になっても泣いてくる子があり、家庭訪問をし、お母さんが小さい子ども扱いしすぎていることがわかった。お母さんが変わらないと子どもはなかなか変わらない。大人も子どもと同じで、ほんとにそうだと思うないと、なかなか変わらないのかなあと思う。

③見通し

期間がどの位かかるかは、その子、その子によって異なる。長くかかって、1学期間位。4歳児の方が、3歳児よりも早いように思う。

これまでは長くかかった子もあったが、先生と仲良くなると、落ちついてくる。お母さんから離れないというのは、まだ園に馴染んでないからで、楽しいところだとわかれば、4歳というのは、もう、友達を求めてくる発達の段階だから、周りを見て、面白そうだなと思うようになる。

④新任の頃の接し方

若い頃は気が短く、理屈では受けとめないといけないうちで、しっかり受けとめることができなくて、こういう子どもは苦手だった。

あれをやってみよう、これをやってみようというように、積極的に働きかけていたと思う。園に慣れさせようという気持ちから、何事も性急にせず、こちらが焦っていたと思う。今でこそ、こういう子は、ふらふら園の中を歩いていてもいいと思うようになったが、あの頃指導した子には気の毒だったなあと思っている。

(2) 武司に対する指導

①具体的な接し方

質問紙にはマイナスのことばかり書いてあるが、いろいろやれる子のような気がする。良いところがあるはずなので、それをもう少し引き出すといいと思う。積極的に自分をだす子は、やりいい。この子もきっと良いところがある。例えば、遊びのリーダーになるところなどありそうに思う。

こういう時は、先生がいつも子どもの中に入って遊ばないといけないうちで、子どもに任せきりで駄目、「遊ぼう」と言ったら、「じゃあ私も入れて」という感じで入っていく。「あなたばかりやってもつまんないから、交

替しようか」とか声をかける。この子自身どうしていいのか、よくわかっていないところも、たぶんあると思う。

4歳ぐらいだと、周りの子も言い返す段階にまでいていないので、相手の気持ちに気づかせる大事な時期だと思う。先生が周りの友達がどんな気持ちでいるかを知らせていかないといけない。こういう子の場合、家でもわがままかもしれないし、家で思いどおりにできないので、園では思いどおりにするという子もいる。したがって母親と連絡をとることも必要である。

子どもどうして鍛えられることが、こういう子には大切。他の子に「順番にしてくれなきゃ嫌だ」と言われると、何度かかかるが、次第にわかるようになってくる。先生はこの子の代弁者になると同時に、他の子にも、「言いたいこと言わないと駄目だよ」と言ったりする。

②原因

以前に施設からきている子で、こんなタイプの子がいた。なんとなく、甘えたかったと思うので、十分に甘えさせればよかったと今は思う。

今、この園にいる子で、こういう傾向のある子は、わりに家で思いが通り、我慢した経験があまりない子だと思う。例えばお母さんが教育熱心で、子どもが何かやりたいと思ったら積極的に何でもやらせてあげるという家の子が、案外我慢がきかない。一般的には言えないが、私の経験の範囲ではそんな感じがする。

悪気はないっていうのか、こうすると相手は嫌なんだということを、知らないように思う。教えてあげないと、わからないし、相手に言われないとわからないみたい。

③見通し

こういう子は、こういった傾向をずっと引きずっていくんじゃないかと思う。5歳になっても、時々こういう傾向がでる子がいる。ほんとうは自分の思うようにしたいが、結局は自分が寂しい思いをするので、我慢するようになり、少しずつ変わっていく。

④新任の頃の接し方

がみがみ注意していたと思う。私は、「みんなを大事にしないなんて許せないわ」と思う性格なので、きっと怒っていたと思う。長く勤めてきたので、そんなに自分を抑えなくても、怒らないことが身につけてきたが、当時はできなかった。

以前こういったタイプの子がいて、その時、力で抑えてはだめだなと思った。信頼関係を築かないで、抑えようとしては、絶対だめだった。反発するから逆効果だった。その子は虫が好きで、豊富な何かを持っていた。今から思うと、あんなに良いものを持っていたのだから、伸ばせられたのと思うと、残念でしかたがない。

(3) 困った子どもの指導例

今はどの子もそれなりに面白いと思うので、苦手な子どもや困った子どもはない。以前は乱暴な子（押さえつけようとしたから）、消極的な子（伸ばそうとしたから）、甘えてくる子（受けとめることが苦手だったから）が苦手だった。

(4) 指導の変化

初年度は、「集団」という意識を持ちすぎていると注意をされたことがある。「一人はみんなのために」という意識が強かったため、つい遊びをコントロールするようになり、子どもへの要求が大きくなっていき、よく怒り、あとで反省することが多かった。

2年目、卒園した子どもに、「私の先生、よく怒った」と言われたのがショックで、それからは「二度と怒らないようにしよう」と決心した。子どもを受けとめなければいけないと、理屈ではよくわかっていたが、実際には難しかった。

3年目ごろから、仕事が面白くなってきた。

6年目頃には、怒らないだけでは駄目だと思いだした。ポイントはぴりっと。言葉かけに注意しようと思った。

10年目頃になって、私も何とかなるかなあと思うようになった。子ども一人一人の変化や個性が面白くなり、それとともに保母という仕事はいい仕事だなあと思うようになった。

後半の10年は、紀要とか研究会のことが頭にあり、ちょっと勉強もした。よく勉強する仲間に影響された面もある。

これまでを振り返ってみると、園児に教えられ、鍛えられることが節目節目にあったと思う。また、自分の子どもの成長を通して、そんなに焦らなくてもいいと思えるようになった。子どもの発達が思春期ぐらいまで見通せるようになったことと、3年間の経験を何度も積んだことが大きい。子どもの成長して行く筋道がだいたい押さえられると、子どもと接する時に、焦らないし余計な心配をしなくていられる。

(5) 現在の指導方法

園に慣れて欲しいので、3歳児には、まず先生を好きになってもらうようにし、意識して怒らないようにし、「はい、はい」と聞いてあげる。

年中児には、少し厳しくなる。

年長児は大人に対して批判力がでてくるので、一緒に育つという気持ちで接するようにしている。例えば、自分が失敗しても隠さないようにし、「ごめんね」と謝ったりする。子どもは私のことを「ドジ」とか「オッチョコチョイ」とか言うこともある。そういうことを大人に対して言わせるのはどうかという考えもあるが、私は悪

いことは謝り、良いことは認めあうことを練習出来たらいいと思っている。

2-2 Bさんの個人史

(1) 生育史

Bさんは昭和23年、ある地方都市に、5人姉妹の末っ子として生まれた。寡黙な姉達の中で、一人、おしゃべりにぎやかなタイプだった。父方の祖母、叔母と同居という家庭環境の中で、皆に可愛がられて育った。

「なかなか複雑な人間関係の中で育ちましてね。自分がそこで果たす役割というのを何か無意識に感じていたというのでしょうか。姉達は静かな人達でしたので、自分が明るくしていると、みんな明るく盛り上がるっていうんですか。そういうのを本能的に自分で感じていたようで……。これはもうずっと後になってから思ったことで、小さい時は無意識だったんですが。そういう役割を演じて育ってきました。それでまあ、大人の期待に応える割と良い子で。可愛がられやすいタイプで。物など貰うととても喜ぶような子どもだったと思います。」

小学生の頃は優等生で、のんびり育った。

中学に入り、「鼻持ちならない」「嫌な子」と言われたことがあって、どちらかというといふ優等生ではない友達グループの中に入った。そこでもの考え方が変わり、勉強だけでできれば他のことはどうでもいいというのは間違っているとか、いろいろの人がいて皆それぞれなんだなあというのを覚えた。

高校は同和問題、女性の働くことなどについて討論会が持たれるような所に通ったが、自分では、お嫁さんになって子どもを育てて家にいたいと思っていた。将来どういう職業につきたいかという討論会で「私は結婚して家庭に入ります。しかし、主人が先立つといけないから手に資格ぐらいはつけておいた方がいいと思います」と言ったことを覚えている。現実的で、夢もあまりない子どもだった。

高校3年になり、大学という所にちょっと行ってみたくなった。親に反対されたが泣き落して説得し、授業料が無料ということで、愛知県の保育系の公立短大を選んだ。それほど勉強もしてなかったのに慌てて勉強した。どうしても保母になりたいという純粋な気持ちで受験したわけではなかった。

(2) 短大の生活

短大に入ったBさんは、当時の学生運動の影響をもろに受け、180度考え方が変わったと言う。大学の授業や、2年間の寮生活の中で革新的な考え方に触れ、「女性も働かなければいけない」と思うようになった。

大学の先生達の理論、特に、当時の学生達の中に浸透

していたT先生の集団主義保育の考え方の影響を受けた。現在まで仕事を続けてきたのも、この頃の体験の結果だと思っている。世の中全体に主張のある時代だったこともあるし、それだけまだ、自分が確立されていなかったとも言えるとは今は思っている。仕事を続けてきたことに関しては、心の中には働きたくないという気持ちもあって、“べき”と“したい”の間でずっと苦しんでやってきた面もある。最近でも本音とたてまえの間で揺れることがない訳ではない。

(3) 保育者になって

卒業と同時に、同郷の先輩が勤務している短大付属の実習園に就職が決まり、Bさんは以後21年間同じ職場に勤めてきた。

就職直後は、自分の考えを強く主張して、上の先生達とよく論争になった。今から思うと、子どものことも知らないのに、よくあんなことを言ったと思うが、その時は一所懸命で、短大で習ってきた理論を実践しようと燃えていた。感情的にならずに、理論的な討論ができる職場だったことは本当に恵まれていた。

論争の中心は、集団が先か、個人が先かということだったが、実践の中で、習ってきたことと実際との調整ができ、次第に個人を大事にすることを学んでいった。

就職してしばらくしてから、1、2年ごとに目標を立てるようになった。園児に「怒らないといいな」と言われたり、自分の子どもが「厳しいけど楽しい先生がいいな」と言ったりした時に、ああそうかと思って目標ができてきた。その際、「〇〇先生のようにしよう」という身近なモデルがあったことも多い。同僚の先生達の良いところをなるべく真似るようにしてきた。目標を決めて努力すると、次第にそのようになってくるように思う。

途中で、大学に入りなおして勉強しようと思ったこともあるが、決心がつかなかった。幸いなことに勉強の好きな友達に囲まれていたので、本を読んだり、研究会に出たりして勉強してきた。

(4) 結婚・家庭生活と仕事

23歳で結婚。1年後、4年後、9年後に子どもが生まれた。「産休を3回もとって」と言われたこともあるが、同僚の先生方の理解があったので、嫌な思いをしないでやってこれた。

仕事に私生活も反映されると考えているので、いつも結びつけて考えている。例えば、自分が母親になって、一人一人の園児により目を向けるようになった。一人目の子どもが生まれ、「どの子も親にとっては大切な子なんだなあ」と思った。自分の子どもを育てたことにより、人生の中での見通しがつくようになり、園児の親とも話しやすくなった。

就職して10年目に夫の母と同居することになり、いろいろなことを考えさせられた。そのことも仕事に取り組む上で影響があったと思う。夫の母は、自分の思うようにならない初めての人だった。子どもと老人は似たところがあり、こういう仕事をしていたので、途中から老人と暮すことになっても、相手をそのまま受け入れようと思うようになるまでの経過が短かったように思う。

今思えば、中学の時に軟派な友達とつきあったことも、大学に入って勉強する友達とつきあったことも全部が今の自分に関係していると思う。生活経験など、総合的なもののような気がする。

(5) 保育経験のなかで変わってきたこと

子どもを見る目、人間に対する目が鍛えられてきたような気がする。前はがむしゃらにやってきたが、楽しめるようになってきた。子どもだけではなくて、大人対大人の関係でも、人間の面白さというか、それぞれの持ち味のようなものが見えるようになった。それによって自分自身も人生を楽しめるようになったのではないかと思うようになった。

仕事を始めて10年ぐらいたってからのことだと思う。

(6) 保母としての自分の適性

保母という仕事は自分にはむいていないとずっと思ってきた。だからこそ頑張ってきたとも言える。どうしてこんな仕事を選んだのかと思ってきたが、今は向いているんじゃないかと思うようになった。そう思えるようになったのは、それぞれの子どもの面白さが感じられるようになってからだと思う。

(7) 自分の性格

小さい頃は「やらしい子。お高くとまって!」と思われていたと思う。

子どもの頃、年下の従姉妹を拒否した思い出があり、自分は人を受け入れるタイプではないという思いがずっとあった。おっとりして、受容的な人を目標としている。自分は辛抱強くないし、ねばり強い仕事には向いていない。

よく喋るし、人づきあいもいいが、しばらくつきあっていると、神経が細かいと言われる。自分では気を遣っているつもりだし、神経質だと思っている。本質的には子どもの頃からずっと変わっていないと思っている。

2-3 聞き手による考察

2回にわたったインタビューの内容の特徴を簡単に整理しながら、Bさんの指導について考えてみたい。

さなえに対してBさんは、まず家庭の様子を聞き、さなえの行動の背景を把握したうえで指導方針を立てようとした。また、入園すぐの子どもかどうかわ、年齢によ

っても接し方が変わってくるという。

具体的な指導方法としては、さなえを連れて歩き、さなえの好きな遊びがあれば誘って一緒にやる中で、まず担任を好きになってもらう。すると次第に落ちついてきて、次第に園になじみ、友達に目が向いてくるという。

受容すること、子どもとの間に信頼関係をつくること、子どもが力を発揮できるようなことを見つけてあげることが指導の基本であった。

武司に対しては、子ども達の遊びに入っていくって、武司と周りの子どもの両方の代弁者となって調整をし、武司が友達関係の中で次第に相手の気持ちに気づいていくように指導していく。こういう子は子どもどうしの中で鍛えられていくことが大切だと考えている。

Bさんはさなえや武司のような子どもに対して悲観的な見通しを持っていない。例えば、4歳児は友達を求めてくる発達段階であるし、5歳児になれば自分の行動がどういう結果をもたらすかわかってくるのでわがままも次第に減っていくだろうととらえている。

次に、新任の頃の指導方法について尋ねたところ、現在の指導とは大きな違いがあった。新任の頃は、子どものあるがままを受けとめることが苦手で、押さえつけようとしたり、伸ばそうとしたりし、自分自身が焦っていたという。具体的行動としては、怒ったり、注意したり、指図したりが多かった。当時指導した子どもに対しては、今ならもっと納得のいく指導ができたのにと残念に思っている。

現在は、一人一人の子どもの面白さが感じられ、以前のように焦ることもなく、受けとめられるということであった。

Bさんの指導の特徴の一つは、子どもの行動、その行動の背景、今後の見通し等を総合的に考慮して行っていることである。また、子どもの成長を思春期ぐらいまで見通せるようになったことと、子ども一人一人の面白さが感じられるようになったことが、現在の受容的な指導が成り立つうえで必要なことであったと述べている。

次に、Bさんの個人史の特徴をいくつかあげてみたい。

Bさんは5人姉妹の末っ子ということで、大変可愛がられて育った。Bさんにみられる根本的なところでの、人間への信頼感、自分への肯定的感情の基盤はこういった初期の人間関係にあるのではないかと思われる。

その一方で、祖母、叔母同居という複雑な人間関係の中で、Bさんは小さい時から、さまざまな人間模様を見つつ育っている。明るく、楽しい人柄の一方で、神経が細やかで、面接の最中も面接者への配慮をごく自然に表

現できる人であった。受容するしないは別として、周りの人の心の動きへの敏感さは、彼女の生い立ちの中で自然に身についてきたものなのであろう。

またBさんは、それまでの自己を否定することが、結局は自己の成長につながったという体験を重ねてきている。例えば、中学に入った段階でそれまで優等生だった自分に疑問を持ち、軟派なグループに入ったことによって、多くのことを学び、それが今につながっていると感じている。また、短大に入ることにより、それまで自分が持っていた漠然とした将来像を否定されるが、それは当時の大学紛争の波と重なって、心ときめく体験として肯定的にとらえられている。また、保育実践の中で、大学で学んだ保育理論を徐々に訂正せざるを得なくなっていくが、そのことも挫折体験としてではなく、自己の成長としてとらえられている。

Bさんの指導方法の変化をまとめると、意図的・指示的指導から受容的指導へ、大学で理論として学習した集団主義保育から個人個人を大切に保育へということができるだろう。

この変化は単に指導方法の変化にとどまらず、Bさんの性格や、人間観の変化と重なっている。若い頃のBさんは、他人を受容するよりも、自分が受け入れてもらいたいタイプで、理想に向かって突進していくタイプではなかったかと思われる。それが、保育の現場での体験、結婚、子育て、姑との同居といった私生活での体験を経て、次第に自分が引き、相手を受容するようになり、それともなって一人一人の面白さが感じられるようになり、その頃から仕事も面白くなり、保母という仕事が自分に向いているのではないかと感じるようになったという。

保育指導に保育者の個人的経験が反映するのは、当然のことかも知れないが、彼女の場合は、仕事と人生が密に影響しあっており、彼女自身もそのことを積極的に認めている。したがってBさんは、基本的には体験派である。しかし、どんな子どもが印象的だったかという質問に、「どの子ども皆印象的だが、忘れてしまう。記憶に残らないタイプです」とも答えている。インタビューの過程をおっても、一つ一つのエピソードがばらばらに語られるのではなく、厳選された少数のエピソードとともに、より整理され、抽象化された彼女なりの考えが語られることが多かった。彼女の場合、体験したことの中から自分なりの理論を作り上げていくタイプといえよう。しかし、独りよがりにならないよう、勉強も怠らない。個人的体験が一般的な理論によって裏打ちされた時、自分に納得出来るものとして内面化されていくようである。その意味で、体験と理論をほどよく統合していくことを

彼女自身が、目指しているように思われた。

また、彼女のこれまでの生き方は、状況に応じてその時その時ベストを尽くすといった適応的かつ流動的なものであった。同様に、現在良いと思っている指導方法も、今後の保育経験、個人的体験の中で、また変更され発展していく可能性があるとしてBさん自身は考えているようであった。

3 Cさんの事例

3-1 Cさんの指導法

(1) さなえに対する指導

①具体的な接し方

誘って、手を引いて中に入っていき、お母さんには帰ってもらおう。そして、ほとんど一緒にいて、納得するまで世話をし、いろいろなことを一つ一ついねいにしあげる。

また、笑い声を出した時なんか一緒に喜んであげたり、何かに興味持ったときに、「やってみようか」と誘う。さらに積極的に、「本見ようか」と誘ったり、「かわいいおくつね」とか言ったりする。

先生にたいしても、友達に対してもいい気持ちではいっていきけるような環境をつくり、先生をなかだちにして、関心を友達の方に広げる。例えば、前からいる子に、「新しく入ってきた子にいろいろ教えてあげてね」と言う。お母さんとも緊密に連絡をとり、母親にこういうふうになってきましたよといって安心させる。

②原因

知的に低いとか、離れるということに対して不安になるというのが原因ではなく、自分の身のしまつだとか、おトイレはどこにあるとか、いろいろなこと全部に対する不安がこのような行動の原因である。

他の子どもたちに対してお友達という感覚が育っていないのは、お母さんとの関係だけでやっていくということがわりと多く、お友達とよく遊んでいなかったのだろう。

4歳から入る子は、お母さんが、家の子どもは2月とか3月に生まれているから、ひょっとするとついていけないのではないかと思い、それよりも自分との関係を親密にしている、もう少しいろいろ自立してから集団生活に入れようと考えているようだ。

3歳から入る子は、近所に友達がいないからとか、兄弟がいないからとか、逆に、兄弟といっしょに通園したいという本人の強い希望とか、希望する園が3歳保育からの方が入園し易いとか、ちょっと自分で手に余るとか、いろいろあって、友達関係と先生を頼りに、と考えているようだ。

③見通し

先生がやさしくして、くっつきたいと思った時には先生が受けてくれるというふう感じれば、安定してくる。しかし、もうわかったかなと思ってつっぱなしてしまうということがないように長く目を向ける。

お部屋の中の遊びなんかがだんだんできるようになり、4歳の子だと、2週間ぐらいで安定する。3歳だと、もっと時間がかかるし、ベタッとひっついていいるしがみつきかたも違う。

子どもは戸外で遊ぶことが大好きなものであるが、それさえすれば安心、出来ないとだめと決めつけしないで、コッコッ何かするとか、じゅくじゅく何かするとか、そういうところを大事にして、いろんな個性があるということを見落さないようにしたい。また、それだけでなく、みんなと一緒に遊びの中では経験させてあげたいこともある。

④新任の頃の接し方

保母が途中まで迎えにいき、だっこしたり、おんぶしたりする。また、お寺や神社へ連れていって、虫なんかつかまえたり、遊んだりして、気をまぎらわせる。

(2) 武司に対する指導

①具体的な接し方

その場その場に応じてどうしてそのようなことをしたのかを、回りの子たちがいっていることも総合して聴く。そして、どこがいけないかその場で注意してわからせる。いけない事はその場で注意し、いいことをした時にはほめることが必要である。

②見通し

4歳の子だと、自分のやっていることが、いいか、わるいか、わかっていても、こういう行動にでるとということもある。この子どもが集団生活をしてきても、こういうのが抜け切れてない場合は、3歳ではもっとひどい感じで出ていると思う。

しかし、よく遊んでくれるし、リーダー的なこともするのでいいと思う。

③新任の頃の接し方

しかったり、やる行動を押えたりする。また、「そういうふうにはしないでね」とか、「あぶないんじゃない」とか、「みんな同じ年なんだよ、いじめちゃいけないんだよ、なかよくしようね」という。

(3) 困った子どもの指導例

①乱暴な子ども

保育者になって3年目のとき、人をたたく、物を投げたあぶない、すべりだいの上に陣どって他の子のじゃまなどをする乱暴な子がいた。観察記録をとったりもした。家庭の背景を考えて、まず、本人と精神的なつなが

りをもとうと心をくだいた。そして、家まで送って行ったりした。さよならするまでに、子どもがいろいろ話をしてくれた。それが仲良くなるきっかけとなったと思う。それだけしかしていないのに、それでうまくいった。

②だだをこねる子ども

今から7、8年前、兄弟でここに来ていた年子の子で、お兄さんが卒園する4歳の時に、3学期に入ってから、今からみんなでなんかやろうかというひっくりかえってヤダという。引っ越しとか、お母さんのパートとかもあってそういう状態が続いた。お母さんがお仕事をやめられてから、園庭のまん中ででんぐりかえるということが少しは無くなった。その後、小学校2年生頃には、そういうことが無くなったと母親から聞いた。この子のために電車に乗って送迎した母親の苦労も察して、わがままなことをいったり困らせたりしないように時にふれて話したりした。父親との関係、おとなしく頭がよいといわれていた兄との比較など問題はあったが、プラスの面をみんなの前に出して認めていくようにした。その子と一緒に折紙を折った時の素直な笑顔は忘れられない。

(4) 指導の変化と背景

新任の頃は、学校で教えていただいた心理学を一所懸命実践しようと思った。子どもの気持ちを大事にしなくてはいけないということが頭にはあったと思うが、現実の子どもを目の前にしてしまうと応用ができなかった。子どもはかわいいが、人数とか、勢いに圧倒されて、十分一人一人を見ることができなかった。1クラス43人だった。

情熱と行動力でやっていて、一緒になって動き回ったり、その子を喜ばせようとして連れ回したりしていた。静かにその子を見つめてあげるとか、むこうが言うのをこちらから待ってるというのがなかなかできなかった。

てきぱきてきぱきとやってたが、見通しがもてないので、そこでいろいろ解決していこうと思い、本人がどういう顔をしていようと、とにかく行動にすぐに出した。泣いてるという事態だけを受けとめて、それを早くなんとかしようと動いた。また、親とのコミュニケーションがあまりなかったので、お家でのその子に対する扱いがわからず、その子がどうしてそうするのかがなかなかわからないので、そういう現象だけをとらえて判断した。

子育てをしている間に、子どもを見る目をつくりあげてきたような気がする。再び勤めて、1歳の子を見たりしたときには、人数も5人と少なかったこともあって、子どもというものの育ち方というのは、ひとりひとり違うんだということがよく見えた。

再び勤めてから7、8年たってから、3歳以上になると、パッとお話するとある程度のことはわかる状態になっ

ているけど、そういうふうなことをわかっていると思わないようにして、気を付けて一人一人みてあげなくてはいけないんだというようなことが実感としてわかった。

また、子どもが何をしがっているのかとか、私にどのようにしてもらいたがっているかなど、一つ一つの要求がよく見えるというか、かわいいなと思うようになった。そして、園を好きになってくれるという自信に満ちてやっていた。

2年、3年すると変ってああいうふうになっていくという見通しができてきたので、今を大事にしてあげようという気持ちがすごく強くなり、がまんづよく、繰り返し繰り返し、おこらないで、丁寧に指導できるようになった。しかし、スピード感が無いかもしれない。

3-2 Cさんの個人史

(1) 生育史

Cさんは、5人きょうだいのまん中として生まれる。人の言うことを聞く方でなくて、自分の思うようにやって、いつも中心になっているまじめな子どもだった。父が教員だったので、小さい時から先生になりたいという気持ちがあったような気がする。

高校時代には、保母さんになりたいとはあまり思わなかった。親は職業婦人なんか向いていないといって保育系の短大を勧めて、また、自分の体も弱かったし、先生にならなくても、将来的にはそういう勉強をしておく、いつか役に立つだろうし、資格ぐらいとろうということになった。

(2) 短大の生活

短大に入ってみたら、60人位が一つのクラスにいて、受身の授業をどンドンして、大学らしくない大学だった。クラブ活動は紙芝居を中心にやった。回りには、音楽ができる人が多かった。しっかりしてて、やさしい人が多かった。あまり気ばらず、ゆったりとした学生生活を送った。

幼稚園の先生になりたいと思ったのは、昔の自分の幼稚園のことを思い出したからだと思う。本が好きだったし、本を読んであげる子がいたらいいなんて思っていた。また、学校の下が保育園で、いつも下から声が聞こえてきて、あなたたちは先生になるんですよっていつているようだった。それから保育原理の先生が、毎日毎日おりにつけて、あなたたちは保育園の保母さんになって、子どもたちといっしょにいろいろやりながら、子どもを育てていくんですよ、といつも言われたので、そういうのがたまたまこまれたんじゃないかと思う。それに、少なくとも子どもが、どんな姿しても、すごく好きだった。

(3) 保育園に就職して

縁があってS市に就職した。その時S市は初めて5人の短大卒業者を採用し、将来を嘱望された。ずっとやろうなんて気はさらさらなくて、やれるだけはやってみようかなと、思っていた。公立の園で、一番下にいたけど、他の同僚は高校出てきた人達ばかりだったので、何かやる時には、リーダーになってやらなくてはならないと思ひ、頑張っけてやっていた。

(4) 子育て、そして、短大実習園に再就職

子どもができたので保母をやめたが、31歳の時に大学の方から声をかけられ、助けて欲しいといわれて、けがをした人の代わりにこの園に来ることになった。その方が戻るまでの間と思っていたが、その方がやめるということになり、正式にやっていただけますかと頼まれた。面接もなく簡単に決まっけてしまい、これでやっていけるのかなと思った。主人や実母が励ましてくれたのががんばってやってみようと思ったが、ずっとやろうとは思わなかった。しかし、主婦をやった時には、やっぱり働きたいなと思っていた。

(5) 短大実習園で

前の園は、自由な子どもの主体性を重んじる保育をしながら、一斉の保育をしていく当時としては普通の保育だったが、新しい園は、集団主義という主義主張があった。

当時の4人のメンバーの中で、1人は主任さんで私より年上の人で、後の2人の若い先生は、集団主義を中心にした保育原理の先生に学んでここに入った人だった。私自身も理解しようと思っけて本を読んだ。しかし子どもの実態に合っけていないと思っけて。理論に実践を無理に合わせようとするところが気になった。それで、頭の中だけでなく、保育しながら話し合っけて極端なものを訂正していった。

そのころから、いろいろモンテッソーリとか出てきて、そういうのに敏感にならざるをえなかった。主として主任の先生とお話して、ああじゃないか、こうじゃないかといっけて、全員で機会を見つけては見学に出かけ参考にしながらも自分達のものを作っけていこうと努力していった。また、保育学会に入っけていろいろな意見や研究に接した。若い2人の先生も出産が終り安定してからは、みんな、このメンバーでしっかりやっけていこうということを支えあっけてきた。家の中まで深くはいりこんでいくというおつき合いのしかたでなかったのがよかったのかもしれない。裏表のない、すごく性格のいい人ばかりだった。

(6) 夫のこと

6つ上の主人が教員で、私がわからないなといっけて話をすると、たいいていそれに対して答えてくれるとか、教

えてもらうという部分が割と多かったような気がする。それが非常に影響を及ぼしているし、大きい。やっている時は、がんばれっていうか、精神的に支えてくれた。

自分の子どももしっかり育てたいというのが非常に頭にあったので、それができなかつたら絶対やろうと思っていたいなかっただろう。基本的には私の実家がみてくれた。

(7) 45歳を過ぎて

45歳ぐらいになったときに、自分の子どもの方はそんなに心配なかったけれども、自分がえらいな、つかれるなと思ったから、やめたいなと思ったことがときどきはある。

50歳になったときに、はっきりとひこうかなと思っていた。そしたら主任の先生があたしやめることにしたのよとおっしゃって、やめるにやめれなく今に到っている。

(8) 短大実習園に関して

私たちは、助手という身分だから、大学の先生の御指導を得て勉強できるのではと思ったこともあった。しかし、現場があって、一日中やって5時過ぎまで仕事が終らないというようなことでは、とてもできそうもなかった。でも、せっかくの大学の付属だから勉強したいということはいつも思っている。最近では、教育課程を作ろうということになり、大学の先生に指導を受けている。

(9) 日常の勉強について

絵本に興味を持っていて、友達の童話作家やその人が関係しているグループの先生の話聞きに行ったりしている。また、幅広く勉強するために、講演会に出かけたりする。子どもが4歳から高校2年生の頃までバレエを習っていたので、それにつきあって見ていた。直接保育へ結び付けようと思って行ったわけでないが、一つのこと打ち込むことのすばらしさを共感をもって過したことはプラスになった。

私達の仕事は一つの事を深く究めるということも勿論大切だが、人間相手の仕事である。しかも、幼児であるということで、その背後にある親も含めて柔軟性が大切な要素となってくる。幅広く社会に対応し人の気持ちを充分くむことが出来るような勉強を一生続けていこうと思う。

3-3 聞き手による考察

さなえに対しては、いろいろなことに対する不安、また、お母さんとの関係だけでやってきたため、他の子どもたちに対して友達という感覚が育っていないことがこのような行動の原因とみている。具体的な指導方法としては、ほとんど一緒にいて、ていねいに世話をし、何かに興味を持ったなら誘う。そして、先生をなかだちにして、

関心を友達の方に広げる、ということを行うと語った。先生がやさしくして、くっつきたいと思った時には先生が受けてくれるというふうに感じれば、4歳の子だと、2週間ぐらいで安定するという見通しである。新任の頃は、だっこしたり、おんぶしたり、また、虫なんかつかまえて遊んだりして、気をまぎらわせたということであった。

武司に対しては、とくに原因については語られず、その場その場に応じてどうしてそういうようなことをしたかを、回りの子たちが言っていることも総合して聴き、どこがいけないか注意してわからせるという指導をするということであった。よく遊んでくれるし、リーダー的なこともするというので、それほど困った子どもと考えていないようであった。新任の頃は、いい聞かせるだけでなく、しかったり、やる行動を押えたりしたと語った。

以上の2つの事例においてもみられるように、Cさんの現在の指導は、その子どもの過去、現在の現象と背景、将来の見通し等を総合的に考慮して行われているといえるであろう。次に、このような指導に到るまでの変化を、指導行動の変化、指導における認知の変化、認知の変化の原因、という3つの観点から、面接の記録を手がかりにして探してみたい。

Cさんの指導の変化を一言でまとめると、動から静へということになるだろう。Cさん自身も「(新任の頃は)情熱と行動力でやっていて、一緒になって動き回ったり、その子を喜ばせようとして連れ回したりしていた。静かにその子をみつめてあげるとか、むこうが言うのをこちらから待ってるというのがなかなかできなかった。」と語っている。

具体的には、さなえさんのように依存的な子どもに対しては、だっこしたり、おんぶしたり、一緒に遊んだりという積極的に働きかける指導から、ほとんど一緒にいて子どもが納得するまで世話をし、十分受容してから、子どもが何か興味を持ったら働きかける指導に変化している。また、武司君のように活発で乱暴な子どもに対しては、しかったり、やる行動を押えたりという指導から、状況を総合的に判断して注意してわからせるという指導に変化している。このような指導の変化の背後には、どのような認知の変化があるのだろうか。

一番の大きな変化は、見通しが持てるようになったことであろう。Cさんは「(新任の頃は)てきぱきてきぱきとやってたが、見通しがもてないので、そこでいろいろ解決していこうと思い、本人がどういう顔をしようかと、とにかく行動にすぐに出した。泣いてるという事態を受けとめて、それを早くなんとかしようとして動いた、

「(今は) 2年, 3年すると変ってああいうふうになっていくという見通しができているので, 今を大事にしてあげようという気持ちがすごく強く, がまんづよく, 繰り返し繰り返し, おこらないで, 丁寧に指導できるようになった」と語っている。

そして, この見通しは一般的なものではなく, 「子どもというものの育ち方というのは, ひとりひとり違うんだということがよく見えた」と語られているように, 個別的なものである。したがって, 指導の際には「いろんな個性があるということを見落さないようにしたい」とも語っている。

また, 見通しが持てるようになったという変化と同時に, 現象だけでなく, 子どもの要求がよくみえるようになり, かわいいと思うようになったことも指導方法に影響を及ぼしていると考えられる。具体的には, 「もうわかったかなと思ってつっぱなしてしまうということがないように長く目を向ける」「3歳以上になると, パッとお話するとある程度のことわかる状態になっているけど, そういうふうなことをわかっていると思わないようにして, 気を付けて一人一人みてあげなくてはいけない」というような意識の変化が語られている。

では, 以上のような指導における認知の変化は, 何によって生じたのであろうか。

「新任の頃は, 学校で教えていただいた心理学を一所懸命実践しようと思った。子どもの気持ちを大事にしないではいけないということが頭にはあったと思うが, 現実の子どもを目の前にしてしまうと応用ができなかった」と語られていることから, 新任の時に, すでに, 子どもの気持ちを大事にしようという意識と, ある程度の子どもの発達に関する知識があったと思われる。しかし, いきなり応用はできなかったようである。ここに実際の経験の重要性をみることができる。

「子育てをしている間に, 子どもを見る目をつくりあげてきたような気がする」と語られているように, 保育に一番大きな影響を与えたのは, 自分の子どもを育てるという経験であるようだ。また, 5人の1歳の子どもを保育したという経験も影響を与えたようである。両者に共通している点は, 小人数の子どもとじっくりかかわることである。

子育て以外に, 保育に影響を及ぼしたと考えられるものとして, Cさんが昔から子どもを好きなこと, また, 昔から本が好きで, そして今でも絵本に興味を持っていること, 保育原理の先生に学んだこと, 職場の同僚と討論したこと, 教員である夫に教えてもらったこと, 講演会やバレエの発表会で学んだこと, をあげることができるが, 子育ても含めて, それらの経験が保育にどのよう

に影響を及ぼしたのかを明らかにすることは今後の課題として残されている。

以上, Cさんの指導の変化とその背景をみてきたが, 最後に, 保育者としてのCさんを支えてきたものに目を向けてみよう。

Cさんは, 短大に入る前に, それほど積極的に保育者になろうと思っていたわけでもないし, また, 就職の時には「ずっとやろうなんて気はさらさらなくて, やれるだけはやってみようかなと思っていて」と語り, 再就職の時には「がんばってやってみようと思ったが, ずっとやろうとは思わなかった」と語っているように, ずっと保育者をやろうとは思っていなかったようである。しかし, おかれた状況では頑張るという性格のようである。

それにもかかわらず, 保育者として20年以上勤めてきた背景には, 夫の物理的, 精神的なサポート, 同僚に恵まれた職場, また, やめるにやめれなくなった状況等がある。Cさんの保育者として成長を考えるには, 単に, どのような経験を積んできたかをみるだけでなく, 以上のようなCさんを支えてきた要因も含めて総合的に検討していく必要があるだろう。

IV. 総合的討論

1. 社会的・文化的 background

本研究における被面接者の回答を理解するために, 被面接者の生育歴に関係する社会的・文化的背景について補足することにする。

3名の被面接者は, 同じ保育系の公立短大の出身者である。従って, 10年以上の開きはあるが, 先輩後輩の関係にある。この公立短大は, 第2次世界大戦後直ちに開設された保母養成所を前身とし, 保育専門学園を母体として全国で初めて設立された保育系の短大である。そして, 厚生省からの資金を得ていたことから授業料が無料であったというのも特色のひとつであった。こうした設立の経緯から, 優秀な学生を全国から集めることができた。3名のうち, 2名がこの短大の所在地とは直接関係がないにもかかわらず, この短大を志願していることから分かる。

被面接者が所属する短大付属の実習園は, 短大が現在地に移転した1966年に創設された。園の規模は, 当初2歳児から5歳児までそれぞれ1クラスずつ, 計4クラス65名で, 職員数は4名であった。その後, 2歳児クラスがなくなり, 現在は, 3歳児(年少), 4歳児(年中), 5歳児(年長)の3クラス, 65名である。

この実習園は, しかし, 幼稚園や保育所としての認可は受けていない。この点は, 彼女たちの身分的な問題の原因となっていたり, 幼稚園でもなく保育所でもないた

めに、保育形態にはっきりとした特徴を出すことがむずかしいといった悩みがあった。また、大学の管理・運営組織との関係が不明確であることが、専門職としての現職教育を進めたり、保育の理論的裏付けや試行的保育を進める上で問題を残していると思われる。

この園の保育の基本姿勢は、何ごとにも意欲的で、自発的、創造的にとり組める子どもにするために、個々の子どもの内在的な力が導かれ、のばされていくように援助や刺激を与えていくという方針にみることができる。そして、ひとりひとりにあった指導や援助のあり方を工夫し、積極的にかかわって、子どもの純粋なおどろきを大切に保育を進めるというものである。

ところで、幼児教育の現場ではガイドラインとして、幼稚園教育要領と保育所保育指針がある。これらのガイドラインとは別に、保育学や教育学あるいは心理学などの知見に基づく幼児教育理論があり、両者を加味しながらそれぞれの園が保育の方針を掲げていると考えられる。面接記録の中に出てくる集団主義保育もその一つである。このほかの理論としては、モンテッソーリ、フレーベル、ピアジェなどの考え方に基づいた保育、あるいは倉橋惣三の考え方による保育などがある。どの理論的立場によるかは、保育者集団の選択によるわけだが、その時の社会的影響を受けることもある。とくに、彼女らの園のように新設の園としてスタートする場合には、保育者集団のほかに、強力な理論家の援助が影響力をもつこともある。しかし、このような理論家の影響力は、両者の関係が希薄になった時に、急速に低下し、新しい理論家が得られないと日々の保育の目標を見失うことにもなりかねない。

付属実習園が開設された昭和42、3年頃、大学を取り巻く環境にはきわめて厳しいものがあり、当時の大学生は、程度の差はあっても、大学紛争の影響を受けてきた。したがって、被面接者3名の場合も、当時ちょうどそうした社会環境の中で学生生活を送り、そのまま実習園に就職した2名と、結婚と育児のために退職して家庭の主婦となっていたが、乞われて現場へ復帰した1名との間には、社会や保育に対する考え方かなりの違いがみられたものと思われる。しかし、今回の面接調査の時点までには、3名とも結婚と育児を経験しており、その点での差は小さくなっていったものと思われる。

2. 子どもの事例の捉え方からみた指導方法の個人差

2つの事例に対する回答から、3人の指導に対する考え方にどのような共通点があり、またそれぞれの特徴はなにかということのみていくことにする。

さなえの事例で、Aさんは、つぎのようにいっている。先生が子どもと一緒に過ごして、信頼関係をつけることから始める。つぎに先生から少しの友だち、そしてさらにもう少し大勢の友だちという具合に、その子どもが動ける輪を広げることに努める。とにかく、みんなの先生だということを、ことばではなく行動で示す。指導には、優しい面と厳しい面の両方が必要である。また、母親にも問題があるので、細やかに接触することを心がける。この子どもは、扱いやすいタイプであるから、4歳児なら1週間で適応できるという見通しをもつことができる。新任のころなら、ことばで諭すこともよくやったと思うが、いま思うと、ことばでいっても子どもの行動は変わらない。

Bさんの回答は、つぎのようにまとめることができる。提示された情報以外に付加情報、とくに家庭での様子を知りたい。入園直後にはこのような子どもは普通によくみられるので、担任や園と仲良くすれば問題はない。もし長引くような子でも、受容して、その子どもが力を発揮できることを見つけてやることから始める。このような状態になるのは、新しい生活に不安があるからだ。こういう子どもは、個人差はあるが、長くても1学期で直る。3歳児に比べると4歳児の方が早い。園では、先生と仲良くなるのが大切である。家庭では、母親が変わらないと子どもは変わらない。新任の頃は、このようなタイプの子どもの苦手な、積極的に働きかけていたと思う。

Cさんの回答はつぎのようになっている。ほとんどその子と一緒にいて、興味をもった時に誘うという形で、いい気持ちで集団にはいって行けるように配慮する。先生を仲立ちにして関心を友だちの方へ広げて行くよう心がける。さらに、母親にも連絡を取って、母親を安心させる。このような状態は、自分がやらなければならないことすべてに対する不安があることによる。つまり、母との関係が強く、子どもとやって行くことの経験が少なかったことが原因だと考えられる。3歳児と4歳児では違うが、4歳児なら2週間で適応できるが、3歳児の場合には長引くと思う。いずれにしても長い目でみて、受容するように、そして個性を見つけてやるように努めるというのが基本的な見通しである。新任の頃なら、途中まで迎えに行ったり、だっこしたり、おんぶしたりしたと思う。

さなえの事例について、3人の考え方にそれほど大きな違いはみられない。4歳児としては、入園当初の子どもであればよくあるケースであり、1週間から長くても1学期の間には適応するという。このような見通しをもって、その子どもと教師との間に信頼関係を作っていくこ

とが第1の目標となる。それをもとにして人間関係の輪を広げられるだろうと予想している。また、母親との関係を改善することに努めることも課題と考えている。このような事例の原因として考えられることは、不安、特にCさんが指摘するような、「自分がやらなければならないことすべてに対する不安」が原因であると考えられる点も共通している。

3人の相違点をあげるとすれば、新任の頃の指導方法にあるといえる。AさんとCさんは、新任の頃もおそらく現在と同じように、子どもと一緒に過ごすやり方を取っていたという。それに対して、Bさんは、新任の頃はこのようなタイプの子どもが苦手で、余裕もなく性急にしていた。それが、経験を積むにつれて家庭での状況についての情報を得たり、母親や教師が変わりながら子どもを変えようとして行く方向性を指摘している。Bさんのように経験とともに指導の観点が変化して行くということは、保育者の指導方法を考える上で重要なことである。

つぎに武司の事例について、みていくことにする。

Aさんは、つぎのように回答している。回りの子どもが自分ではなにも言えなくて助けを求めてくる場合と、相手にいい返せるようになっている場合とでは、先生としての出番や言葉のかけ方は違って来る。前者の場合には、加勢したり助言したりする。後者の場合には、両方の言い分を聞いてやり、調整したり、黙って見守ったりして、一方的に処理しないようにする。相手の気持ちを理解させること、その子どものよい点を認めてやること、が大切である。このような子どもには、社会性を身につけさせることが必要である。すぐに変わるものではなくずっと引きずって行くと思う。卒園までに少しでも変わってくれたらという気持ちで取り組む。新任の頃は、主任のように、キャリアのある先生の助言を聞いてあれこれためしてみる。信頼関係も大切だと思っていたから、やさしい言葉をかけながらもいけないときはきっぱりした態度をとるようにした。

Bさんの回答はつぎのようであった。よいところがあるはずなので、それを引き出すといい。4歳ぐらいだと周りの子ども言い返す段階にまでいっていないので、相手の気持ちに気づかせることが大切である。家での様子を知ることも必要なので、母親と連絡をとる。こういう子は、子ども同士できたえられることが大切だから、きたえ合うように援助する。こういう子は、母親が教育熱心で、積極的になんでもやらせるというような、我慢した経験があまりない子が多いと思う。こういう子は、こういった傾向をずっと引きずって行くと思う。新任の頃は、がみがみ注意していたと思う。しかし、信頼関係を築か

ないで抑えようとしてもだめだった。今なら怒らないで、その子のよいところを伸ばすことができたのと思う。

Cさんの指導のしかたは、つぎのようにまとめることができよう。すなわち、その場その場にに応じて、どうしてそのようなことをしたのかを、周りの子どもたちが言っていることも総合して聞く。そして、どこがいけないかを注意してわからせる。4歳の子だと、自分のやっていることのよし悪しが分かっているにもかかわらずこういう行動に出ることがあるが、集団生活を経験してきてもこういうのが抜け切れてない場合は、3歳ではもっとひどかっただろう。しかし、困った子どもとはみていない。新任の頃は、しなかったり、やる行動を抑えたりした。

武司の事例についての3人の指導方法についてまとめると、3人の共通点として、発達段階にもよるが、両方の言い分をきいてやること、相手の気持ちを理解させること、その子どものよい点を認めてやること、この子どもの状態はすぐに変わるものではなくずっと引きずって行くことなどを指摘することができる。

新任の頃の指導について、3人の間にやや違いが認められる。Bさんは、怒っていたと思うが、信頼関係を築かないで抑えてもだめだ、年をとったら怒らなくなった、といっている。それに対して、Aさんは、キャリアのある先輩の助言を受け、試行錯誤で行く、信頼関係も大切だが、はっきりけじめをつけるという。しかし、具体的にどうするという事は明らかにされていない。Cさんも、しなかったり、抑えたりしていったらという。

2つの事例に基づいて3人の先生の特徴をまとめてみると、事例の捉え方についての基本的な違いは認められない。しかし、これらの事例についての指導のしかた、新任の頃の指導方法などでは、BさんとAさんやCさんとはやや異なっているようである。

例えば、Bさんは教師の一方的な働きかけよりも、子ども同士の働きかけが互いに影響を及ぼしあうことに効果を認め、保育者はそれを援助するという位置づけをしている。子どもはしだいに変化して行くが、保育者自身も新任の頃と比べると現在までにさまざまな経験によって変化するものだという見方をする。

一方、Aさんは、子どものある傾向を直したいときに、ことばで言い聞かせることは無駄だと気づくようになったことが特徴的である。このような考えに至ったのは、経験もさることながら、自分の子どもの成長を通して、あるいは、集団主義からひとりひとりを大事にみていくという方向に変わったことによる。さらに、実際の保育や意見の異なる同僚や先輩との議論を通して、保育の仕方も変わっていった。また、勉強したことももちろんであるが、結婚、子育ての経験も影響している。

面接記録の分析を通して明らかにされた3人の違いには、つぎのようなことも関係しているだろう。すなわち、AさんとCさんは、子どもに現在できてきている行動や態度にどのように対処するかが語られ、性格や特性は直接的な指導の焦点とはなっていない。そのために提示された事例を多面的に分析することがなく、指導方法も、こういう子どもならこういう指導をするというようなかたちでは述べられてはいない。一方、Bさんは、提示された事例に限定することなく、さまざまな角度から捉えようとしている。このように問題を多面的、分析的に捉えようとするかどうかという姿勢そのものが、教師の指導方法の個人差に反映されるだろう。

3. 指導理念の形成にかかわる要因

3人のそれぞれの個人史を手がかりにして、保育者としての指導理念の形成にどのような要因がかかわっているかを検討してみよう。

Aさんの個人史の特徴は、幼少期は物心両面にめぐまれ、また高校・短大時代は優等生であったこと、幼児教育が希望の道ではなかったこと、という2点にまとめることができる。このように書くと保育者としての生活が不本意な悶々とした日々であったかのように受け取られるが、そうではなく、実習園の創設にかかわり、大学で学んだ集団主義保育を実践しようと同僚とともに努力してきた。基本的にAさんは、置かれた状況の中で精一杯自分の役割を果たすという生き方をしており、この生き方は、結婚後のさまざまな状況の中でも変わることがなかった。とくに、妊娠、出産、育児の過程で園児の親を子育ての先輩としてみるようになったり、親が心理的に近づいてきたことはその後の保育者としての活動に積極的な意味をもたらした。

一方、Bさんは、つぎのような環境の中で育ってきている。Bさんは、複雑な人間関係の下ではあったが、明るい性格の末っ子として育った。高校までは、現実的で、保母にどうしてもなりたいたいと思っていたわけではない。短大に入り、当時の学生運動の影響を受けて、革新的な考え方に触れた。短大時代に、集団主義保育の影響を受けたことはAさんと同じである。就職後は、同僚や先輩と話し合ったりして、次第に個人を大切にするようになった。また1、2年ごとに目標を立てて、努力するというかたちをとった。仕事と私生活をいつもむすびつけて考えている。例えば、母親になったり、夫の母と同居したり、さまざまな生活経験が今の自分に関係している、というように。保育経験を通して、子どもをみる目、人間に対する目が鍛えられてきた。人間のおもしろさを知り、自分自身人生を楽しめるようになってきた。そのことが、

保母の仕事が自分に向いているのではないかという考えをもつようになったこととも関係していると思われる。

Cさんの個人史は、つぎのようにまとめられる。5人きょうだいのまん中として生まれたCさんは、自分の思うようにやって、言いつけたりする方が得意な子であった。小さい頃から先生になりたい気持ちはあったが、ぜひ保母さんにということではなかった。短大入学後、保育原理の先生が、おりにつけて、保母さんになって、子どもたちと一緒にいろいろやりながら、子どもを育てていくんですよと、いつも言われた。保育園に就職して、年下だったが、やる時にはリーダーになってがんばった。子どもができてやめたが、31歳の時に現在の園に臨時で入り、そのまま今まで続けている。はじめの園は、自由な子どもの主体性を重んじる保育をしながら、一斉の保育というのをきちんとして教育していくという普通の保育だったが、新しい園は集団主義の保育だった。こうしたやり方については、いろいろやりながら話し合いで極端なものを訂正していった。

3人に共通していることは、今の時代と比べるとかなりきょうだい数の多い家庭でかわいがられて育っていること、そして心理的には安定した環境の中で成長していること、大学入学に際して特に強い希望で保育系短大を選んでいくわけではないこと、現在までに結婚と子育てを3人とも経験していることなどである。

Cさんは、結婚後一時期専業主婦をしており、子育てと仕事の両立といった問題については、ほかの二人とは異なった状況におかれていた。

3人とも同じ短大を卒業しているが、在籍していた時期は、Cさんが最も古く、AさんとBさんの二人とはおよそ10年の開きがある。

子どもを受容することは、保育者にとってまず求められることであるが、それは、保育者自身が心理的に安定していることを前提としている。この点、3人は、いずれも恵まれた環境の中で育っている。一方、保育や社会に対する考え方は、短大時代に形成されたものと思われる。その内容は、Cさんと、AさんBさんとは、まったく異なっている。すなわち、Cさんが在籍していた時代に短大で指導的立場にあった先生は、とにかく保育者になること、そして子どもを大切にしようということを繰り返すタイプの人であった。このような語り口には、いささか精神論的な、教師聖職論に近い考え方があったものと思われる。一方、AさんとBさんが在籍した時代は、全国的に大学紛争が広がり、短大の講義や学内、学外のサークルを通じて、その影響を受けてきた。保育についていえば、集団主義保育の影響を強く受けた。専門職としての保育観の形成は、このようにして形成され

たものと思われる。

しかし、それぞれの時代背景を受けて作られてきた保育観は、就職後同僚との共同作業を通じて変化していく。こうしたことから第2の要因として、就職後の同僚の影響をあげることができる。とくにAさんにとって、自ら作り上げてきた指導課程が、その後のメンバーの入れ替わりと共に、大きく変化して行った経験は、保育観の変容と新しい保育観の形成に大きな影響力をもつものであった。このような保育観の変容は、理論が現実と合致しないことによって検討に迫られる。さらに、保育観の違う人たちとの討議を通して検討がなされる。3名の経験談によれば、経験豊かなCさんがもうひとりの保育者と比較的近い考え方をもち、若い2人との間で議論が交わされた。そして次第に保育方針が改められていったようである。

第3に、保育者自身が結婚や出産を経験したことによって、子どもをみる目が変わることがある。また結婚や出産は、父兄が保育者を見る目を変えるきっかけともなるのである。Aさんにみられるように、園の親たちがAさんをよき理解者としてみるようになり、心理的に近づいてきたように思われる経験があった。Aさんにとってもお母さんたちよりは、子育てにおいて自分の先輩であり、何かあったら教えてもらおうという謙虚な気持ちで接するようになった。

第4に、あるタイプの子どもが保育者の考え方を変えることもある。例えば、障害をもった子どもを受け持ったこと、子どもの何気ない言葉を聞いたことなどが、保育者の新しい目標にむすびついたりするものである。いろいろなタイプの子どもを受け持つことは理論通りにはいかないことが多いし、それまでの経験も役立たないことも多い。そのようなとき、Aさんのようにじっくり子どもの姿をみてありのままの子どもを最大限受け入れようとする姿勢は大切であろう。一方、子どもは、大人とはちがって自分の気持ちを素直に表出する。Bさんがか

つての受持ち児から「よく怒った先生」ということばを聞いた経験は、重要な役割を果たしたのである。

保育者の指導理念は基本的には学習によって形成されるものと思われる。その上で、これらの要因が相互に関連し合って影響を及ぼすと思われる。

これまでの考察から、共通していえることは、保育者がいざずらに子どもを抑えたり、働きかけたりするのはなく、子どもの成長を思春期くらいまで見通した上で、ごく自然に、ありのままの子どもの姿を受け入れ、じっくり子どもをみていくことが大切であるということだろう。

4. おわりに

本研究では、2つの事例を提示し、その事例に対する指導の仕方からそれぞれの保育者がもっている指導の考え方を検討した。さらに、保育者自身の個人史を語ることによって保育に対する考え方の背景要因を明らかにしようとした。

今回の研究では、面接の事例数が3例と少なく、今後の研究に向けての試験的研究となった。面接の対象になった3名の保育者はいずれも経験20年以上の人ばかりであったが、これまでの結果から、結婚・出産も終わった10年前後が一つの大きな節目となると思われる。そこで、今後の研究においては、経験年数を10年以上に引き下げてもよいと思われる。

文 献

梶田正巳, 杉村伸一郎, 桐山雅子, 後藤宗理, 吉田直子
1988 具体的な事例へ保育者はどう対応しているか 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 35, 111-136.

(1990年9月1日 受稿)

ABSTRACT

A Case Study on Process of Child-Caring Belief Formation

Masami KAJITA, Shinichiro SUGIMURA, Motomichi GOTO,

Naoko YOSHIDA and Masako KIRIYAMA

This study aimed at clarifying process of child-caring belief formation on caretakers in kindergarten and nursery school through their caring experiences. A semi-structured interview was done to three caretaker who had worked more than twenty years. The interview consisted of two parts: (1) how interviewee would approach toward two cases of problem children presented, (2) look back on her life history including child-caring experiences.

Each caretaker's interview protocols were summarized and discussed from the viewpoint of formation process. Finally, general discussion addressed to various aspects of formation process: (1) social and cultural background, (2) individual differences of child-caring belief, (3) the factors of formation process.